緑爽会会報　No.169

2020年8月25日発行
日本山岳会　緑爽会
発行人　富澤克禮

デザイン・制作　関塚貞亨

～～《メッセージ》～～～

調査など進めて行く段階ではいくつもの偶然が起こり、幸運も重なって、今迄気が付かなかった事実もつまびらかになった。労力を費やした甲斐が有って実りあるものになった。結果として、家系図上で普通はなかなか遡れない先祖の代まで調べることができた。

金次郎・トヨ夫妻

新型コロナウイルス感染の話の微塵もなかった昨年末のことであった。かれこれ60年前から聴き続けているN響定期コンサートのはねた帰りの電車で、同行の桜新町在住の姉と会話していると、親戚の関勝一氏（岡野トヨさんの大甥にあたる）宅の管理を任されているポストに一通の書置きが投函されていたとの話があった。差出人は武蔵小杉在住のトヨさんの次女、渋谷テル子様の次女である渋谷三奈子様（※１）からだった。後に分かったことであるが何度も何度も訪ねて来られていたようで、申し訳なかった。というのは、関勝一氏は祖父貞明の代からの盆栽業を継ぎ、本場埼玉県川口市安行に移住していて、いつも留守だったからだ。

早速、三奈子様にお詫びの電話をしてことの次第を聞き、その後三奈子様の弟、鋼太郎氏ともお会いできることになった。普段お会いすることが無かったので初対面でビックリされたと思う。

そこで岡野金次郎三男満氏のご長男眞氏（※２元香川大学教授、前橋市在住で現在 74 歳。岡野総合計画研究所を経営。一級建築士・工学博士として各方面で活躍されている。）を紹介された。以来、ファミリールーツに関する調査、検討等でお互いに報告するなど緊密に連絡しあっている。

現在、金次郎地元の平塚で、長女小永井ユキ様の長女である好子様（※３）の婿養子、暹（あきら）氏を中心に、金次郎のお孫さん達が出版協力の作業を進めておられる。

前出岡野金次郎次女の渋谷テル子様の武蔵小杉のお宅は、岡野トヨさんが晩年身を寄せていた家である。昭和 45 年頃に関家の伯父伯母と私ども夫婦で一度お尋ねしたことがあった。当時、トヨさんはとても元気で、テレビを見ながら編み物に精を出しておられ、私達の結婚の祝いにとご自身で編んだ手袋や靴下、それにご自身で折られた千羽鶴まで頂き感激したのを思い出す。

【　調査開始　】

上記の通り、岡野眞氏はトヨさん側の情報が知りたくて、渋谷三奈子様と連絡を取っていたのだろうが、関家と連絡が付かず、先に進まずに困っていたのであろう。こうして接点ができ、微力ながら私も本格的に協力することになった。

改めて現状をひも解いてみると岡野家に関連する家系の繋がりが明確ではなく、本の記述内容に対するエビデンスも重要であり、それらを調べる必要があった。しかし、過去の事を知りたくても周囲の関係者は既に代替わりが進み、昔のことを知っている身内が亡くなっていたり、残された記録等が無かったり、情報が簡単に入手できないことを痛感した。

一方で、今しっかり調べて残しておかないと後世の人間が何もわからなくなるのは自明の理であると思い、やるのなら今しかないと決意。泥臭く地道に調査することにした。

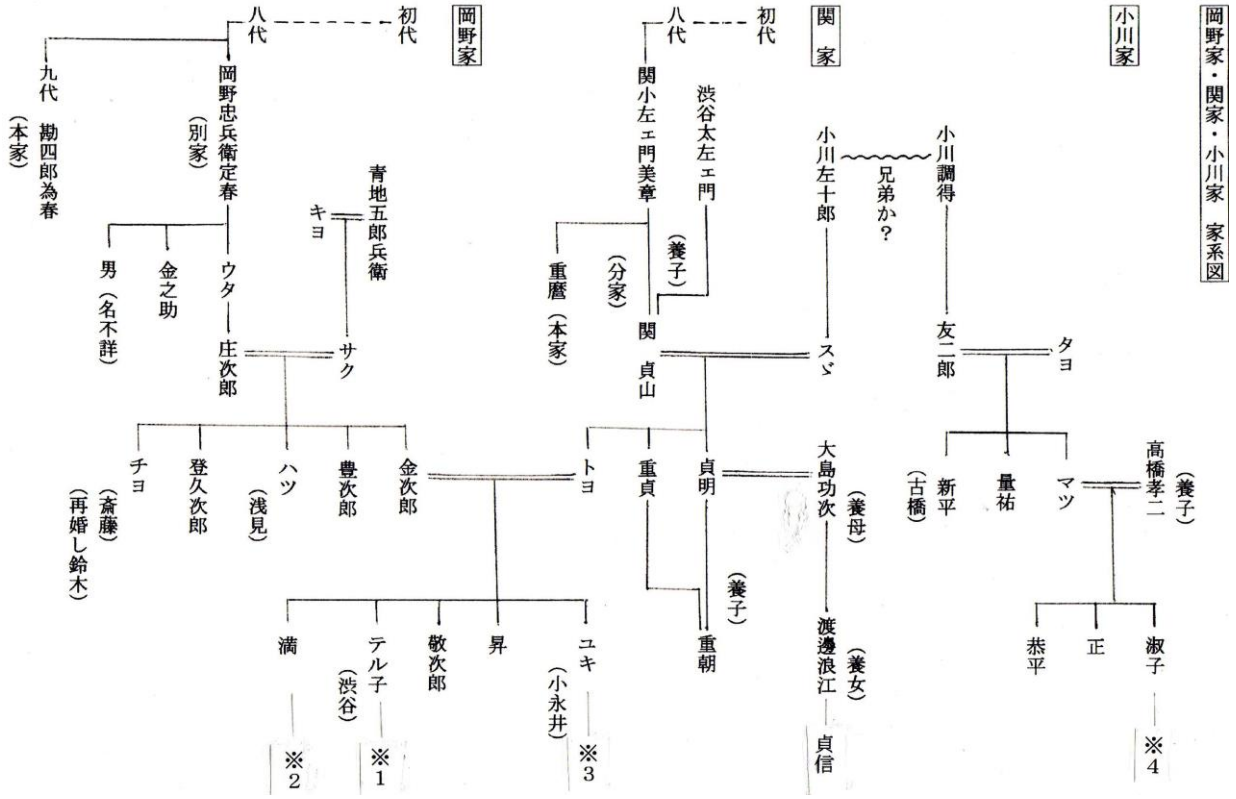
家系の調査の仕方にはいろいろあるが、除籍、改製原戸籍などの謄本の入手から始まった。更に今のような戸籍が無い時代のことは必要に応じて菩提寺の過去帳を調べてみることにした。

それは江戸時代の後半から明治時代の前半かけての推移を知るうえで役立つもので、関係する親戚の繋がりを知る上でも必要な作業であった。

関家の菩提寺は江戸時代大凡 1500 年代に遡るもので小田急箱根登山鉄道の箱根板橋駅近くの大久寺に先祖は眠っている。眞氏のご協力で小田原市郷土文化館、図書館などで資料を調べて頂いた。

調査からはトヨさんの父貞山が由緒ある関家八代、関小左エ門美章の養子となり 1880（明治 13）年に分家したことが分かった。

貞山は足柄上郡松田在の渋谷太左エ門の七男として 1829（文政 12）年に生まれ、1874（明治 7）年 4 月に小川左十郎長女のスゞと結婚、同年 12 月に夫婦養子になった。翌年 4 月には長男貞明が生まれた。勿論養子になった事情は不明であるが、眞氏によれば、美章は当時 65 歳で名家の跡継ぎを心配したからではないか。つまり美章本人も長男重麿も小田原藩士で、かつ熱心な佐幕派だったので明治新政府の中でどう生き抜くのか、さらに次男重光を 1867（慶応 3）年に、三男鋭三を 1862（文久 2）年に亡くし、心配が重なったからではないかと推測している。実に貴重な情報が入手できた。



家系図の注釈（参考）

岡野家・・・忠兵衛定春は横浜市保土ヶ谷で代々、金物を扱う豪商「鍋屋」八代の二男として 1758（宝暦 8）年に生まれた。兄の為春が本家九代を継いだため、定春は別家をおこす。なお、本家の十代勘四郎良親、十一代勘四郎良哉の親子は岡野新田開発で知られ、また、金次郎と同世代の十二代欣之助善哉は篤志家としても有名。

関 家・・ 美章は 1809（文化 6）年に生まれ 1882（明治 15）年没。小田原藩士として活躍した。なお、長男、重麿は佐幕派の小田原藩士で活躍。

重麿の長男重忠、次男重孝、三男重光は何れも海軍少将。重麿の孫の重広は蛍光灯の研究で「日本の照明の父」と言われる。岡野トヨの父、貞山は 1880（明治 13）年に分家するも 59 歳で没。

更に私自身が昔から良く分からなかった岡野トヨさんと小川家の関係についてこの機会を捉えて調べることにした。

岡野トヨさんを語る上でその生い立ちに関係する人々がどのような関係であったかを知る必要がある。特に関貞山の妻である小川スゞの家系に係ることである。中でも私が幼少の頃から気にな

っていた岡野金次郎の妻トヨさんと、親戚の関家の伯母達が「小田原の伯母さん」と言っていた小川マツさんとの関係である。事実、お二人が一緒にトヨさんの実兄である桜新町の関貞明を訪ねて小田原から来られたお姿をよく拝見していた。私の姉はその小川マツさんの息子、正さん、恭平さんが桜新町に来た時に一緒に遊んだことがあるという。また、マツさんの娘さんの小川淑子様が経営していた湯河原の旅館に泊ったこともあるという。

岡野眞氏からは父親満氏の住所録から小川正、淑子、恭平という名前が読み取れるとのこと。また、小田原で洋品屋（仕立業）を営んでいる小川マツさんの兄弟の古橋氏に洋服を頼んでいたという話が出てきた。また、二男岡野敬次郎氏が古橋宅の隣に家を建て、相互に親しくしていたのも事実。であれば親戚には間違いないであろうが益々お二人の関係を知りたくなってきた。

【　小川家への突然での訪問　】

岡野眞氏の父満氏の住所録から小川家の住所の記載があったとのことで当時の住所を教えて頂き一か八かで思い切って渋沢の小川家を訪問することにした。

電話番号も分らないのでパソコンで検索したグーグルマップを手掛かりに目ぼしを付けながら地図の上では渋沢駅から震生湖に行く途中にある小川家を目指して歩く。だんだん畑が出てきて道に迷い、途中で道端の石垣に腰を下ろしマップを見ていると偶然に若い女性が通りがかった。目的の行き先を告げるとスマホで検索、そこまで自分の車で送ってくれるという。少し躊躇したがくたびれていたのでお言葉に甘えて車に乗せて頂いた。「確かこの辺です」と言われ、丁重にお礼を言って車を降りた。

早速、目的の家を探したが小川家なる表札が見当たらない。諦めて帰ろうと頭をよぎったが折角来たのだからと思い、近くの小傳さんという表札の玄関の前でウロウロしていたら台所の窓からどちらをお探しですかと声が掛かった。小川淑子様の名前を出したらここですと言う。何となく安堵して訪ねてきた理由を話すとご主人が出てきてくれた。何を隠そうその方が小川淑子様のご長男で小傳勝男氏（※４）であった。岡野トヨさんと仲が良かった小川マツさんのお孫さんである。

（左から）恭平さん、マツさん、正さん、淑子さん

さて、突然の訪問を詫び、部屋に通されて経緯をお話すると、これも偶然なことに、丁度家中で断捨離の最中だったという。そして、私が来訪の目的をお話すると何と私が知りたかった過去の私の記憶を証明する数々の昔の写真を出して来てくれた。

最もビックリしたのは知りたかった小川家の家系図迄見せて頂けたことで、ご主人がかなりの労力を費やして纏められたもので偶然完成したところだったという。思いもよらず貴重な資料に接し大変満足した瞬間だった。

全くの突然の訪問で、小傳氏もこの家が良く分かったね？ と驚かれるほどであったが、それにもまして断捨離の真っ只中に来られたタイミングは何という偶然かと思われたようだった。初対面にも関わらず快く迎えて下さり感謝感激のひと時であった。

湯河原の旅館の話をお聞きし、岡野金次郎三男満氏がお知合いだった小川マツさんとそのお子さんたちが写った写真を頂いたり、習字が上手だった淑子様の遺品なども同じ趣味を持つ私の姉の為に頂いたりした。

本当に嬉しかったのは、小傳氏が小川家の家系図を完璧に作成されていたこと。そして快くコピーして頂けたこと。正に仲良しであった岡野トヨさんと小川マツさんの関係を知る上で貴重な家系図を頂くことができた。

改めて、訪問したタイミングが小傳家の断捨離のタイミングと合致した偶然はいったい何なんだろう？ と思う。思い切って出かけた甲斐があった。

なお、小傳氏は長いこと母の淑子様と湯河原の旅館を経営していたが、高齢になり引退して今の渋沢に住むことになったそうだ。小傳氏からは小川マツさんのご兄弟、新平氏が小田原で洋品店を営んでいたとの情報を聞くことが出来たが、祖母の小川マツさんと岡野家のトヨさんとの繋がりまでは良くご存じないようであった。

しかし、岡野眞氏から父はいつも小田原に洋服を注文しに行ったことや、眞氏自身も敬次郎伯父を良く訪ねたとの話を聞いたがそれとも合致している。

両家の関係の核心部が分かってきた、手掛かりの有った突然の訪問であった。

【　トヨさんの実家、関家と小川家の関係調査　】

帰宅した後日改めて岡野家と小川家の家系を検討してみるとトヨさんの父親関貞山の妻小川スゞが、小川家の先祖の方と家系的にどのような関係にあるのか今一はっきりしない。これを知るには小川家の先祖の戸籍を調べる必要がある。そこで早速、小田原市役所戸籍係を訪問した。

その結果、小川家の先祖はマツさんの父小川友二郎と祖父小川調得である、取り敢えず小川友二郎（1864 年・元治元年生まれ）の除籍謄本の請求をしてみた。

結果は残念なことに既に戸籍の法的保存期間が過ぎていて小田原市役所では廃棄されたとのことで入手はかなわなかった。しかし、親切にも係の方が小川友二郎の実家が横浜であることを調べてくれた。

日を改めて後日、横浜市関内にある横浜市役所を訪問し除籍謄本を要求したところ、「大正 12 年 9 月 1 日の火災により戸籍簿及び除籍簿焼失の為、交付できず」の文書を受領するに至った。万事休す！ いまだ小川マツの祖父、調得と小川スゞの父、小川左十郎の関係は不明のままで、今後の解明を期する。

【　各種文献調査　】

さて、確かに親戚であることを知るもう一つの手段に各種文献調査がある。そこで今まで集めてきた岡野金次郎に関する文献を全て読み返すこととなった。

その結果、今まで細かいところ迄読み解けなった両家の関係が記述されていることに気づいた。何と岡野家と小川家が親戚である確たる記述が見つかったのである。

① 小島烏水の弟、小島栄氏の手記「岡野金次郎氏を憶う」の中に岡野家の家系を紹介する次の記事があった。

「三男満氏は群馬大学助教授の他、親戚にも流れを汲んで山岳人が多く、望月達夫、浅見義雄、小川量祐、同、正の諸君の面々である」とある。ここに記載されている人々は戸籍謄本や関連した調査のほか、岡野眞氏から教えて頂いた情報で分った。即ち

・望月達夫氏・・・岡野金次郎の兄弟、登久次郎は望月達夫の叔母にあたる望月捨子と結婚
・浅見義雄氏・・・岡野金次郎の兄弟、ハツのご主人浅見省三の弟
・小川量祐氏・・・小川友二郎は四男六女に恵まれ、その長男。長女マツは妹。
　　四男新平は古橋家の養子となる。
・小川正氏・・・・小川マツの長男で小川淑子の兄。

② その他、岡野金次郎の三男、満氏の住所録に小川正氏の名前が載っている事実（眞様より）
③ 戦時中、岡野金次郎が湯河原の小川家に一時住んだとの話がある。

平塚図書館所蔵の「故岡野金次郎を偲ぶ、日本の山岳会の先駆者」なる文章には「昭和 20 年、戦災にあい吉浜小川別荘に移る」とある。これはあくまでも推測であるが、多分当時小田原や湯河原で旅館業を営んでいた小川マツさんの所有していた旅館かもしれない。後に小川マツさんの娘淑子様と孫の小傳氏が湯河原で旅館を経営していた経緯もある。親戚でもあるし、トヨさんの口利きがあったかも知れない等、憶測は出来るがこのことに関しては今後更に調査を要する。

以上のことから判断して岡野家は関家、小川家とは親戚関係にあることを確信するに至った。

（前列左から）昇氏、敬次郎氏、満氏、岡野翁

ようやく岡野トヨさんと小川マツさんの関係も分った。長い調査で結構大変だったがずっと疑問に思っていたことが解明できて今は爽快な気分である。

本調査の中でタイムリーに的確にアドバイスして頂いた岡野眞氏に感謝申し上げる次第である。と、ここでひとまず区切りがついていたが、また意外な展開になったのである。

【　追補　】

前項までの調査では様々な観点から岡野家と小川家は親戚であることが分ったが、岡野金次郎の妻トヨの母スゞの祖先と、小川家のマツの祖先とが戸籍ではどうであったか確認する段階で、戸籍法の改正により江戸末期から明治初期の間の戸籍保存期限が既に切れていて入手出来ず、明確には解明出来なかった。また、戦時中に平塚市空襲により焼け出された金次郎一家が疎開した先が吉浜の小川別荘とある。何故、疎開先が吉浜小川別荘であったのか、どのような関係であったのかそのいきさつを語る記述が無くエビデンスとしては乏しいものがあった。

ところが、執筆への協力作業を進める中で、最近になって金次郎のお孫さんの一人から思いもかけず岡野金次郎の日記を提供して頂けた。

この日記は第二次世界大戦での平塚市の空襲をくぐり抜けた大変貴重な日記で、関東大震災後の大正 12 年 10 月から晩年平塚市で亡くなる昭和 33 年 2 月迄毎日のように欠かさず書き続けた金次郎の貴重な日記である。早速、読み解いたところ、特に昭和 20 年の空襲に直面した状況が生々しく記載されていて、今迄解明できなかった小川家との親戚づきあいの深さなどが明確になり、貴重なエビデンスとなりこの関係が解決した。

終戦の年の状況をその日記から拾ってみると次の通りである

＜昭和 20 年 7 月 16 日・・・金次郎 70 歳＞

夜 11 時頃突然の空襲で平塚市は火の海と化す。
家も被害を受け沢山の本が焼失、幸い毎日書いていた日記は難を免れた。
金次郎、トヨ、敬次郎、ミヨシの四人は畑に出て助かった。
焼夷弾が前後左右に落下して歩するのに難儀した。死に直面。

＜昭和 20 年 7 月 20 日＞

金次郎の妻トヨの母方の親戚、小川マツ所有の吉浜の別荘に引っ越す。

小川マツは小田原に住んでいたが、しょっちゅう会っていろいろ相談事をしていた間柄で前日 19 日には引っ越しを決断、部屋入居が決まっていた方がいたが、好意により譲って頂き入居できた。

環境は広い別荘で畑も広く、食糧難の折サツマイモ等を植えたり畑仕事をしたり、海で海草を拾い食料不足を補った。

日記には毎日、日課である近隣の山への散歩が書かれており、また親戚づきあいから人の出入り、娯楽、妻トヨの健康状態など、その当時の生活が読み取れるものである。

さて、日記から山関係の記述を抜粋してみると、生涯愛して止まなかった富士山には度々出掛け、いつも懇意にしていた山小屋の主人と歓談していたり、親戚の小川マツさんの兄、量祐氏とは戦争前からよく山に行く等付き合いがあることが分った。

日本山岳会を退会してからも望月達夫氏と共に日本山岳会を訪れ三田幸夫氏に会ったり（会報「山」171 号に記事あり）、盟友の小島烏水とは吉浜の小川別荘に疎開した旨ハガキで知らせ、烏水からは慰問のハガキが届くなど生涯堅い絆で結ばれていた。茅ケ崎の槙有恒宅にも時々訪問するなどこまめに動いていた日常が目に浮かぶ。

生涯、自然美を愛し続けて山行を重ねた金次郎が戦後昭和 27 年の大晦日にウェストンとの邂逅のなかで交わした記述を紹介する。

「あるとき老生はウォルター・ウェストン氏と会談時、『自然美界を友として悠々自適するので孤独を感じたことが無い』というたらウェストン氏もそうだそうだ　Man can be alone with great nature との返事なので老生は同意見と云うて互いに笑った。」　　完

三回目で登頂　深田久弥の「未丈ヶ岳」登山

吉田　理一

新潟県魚沼市(旧小出町)からは優美な稜線を描く未丈ヶ岳(1552.9m)を望むことが出来る。しかしながら未丈ヶ岳に目を向ける人は稀である。越後駒ケ岳・中ノ岳・八海山からなる越後三山が、あまりにも立派に聳え立っているからである。登った事がある人は地元でも極めて少数であり、深山未丈ヶ岳は玄人しか登らない山である。

私は意外な場所で深田久弥が未丈ヶ岳を語る肉声を聞く機会があった。平成 14 年 8 月 24 日「フォーラム IN 安曇野・小谷」の参加者のうち雨飾山登山コース参加者 41 名は貸し切りバスで移動した。ヴィレッジ安曇野から小谷温泉の雨飾山登山口にある山田旅館までのバスの中では、深田久弥を撮影した貴重な VTR や NHK アナウンサーによる朗読「日本百名山　雨飾山」のテープが紹介された。深田久弥の講演会の録音テープも流された。その中で「未丈ヶ岳などという山を知っている人は少ないでしょう、越後の枝折峠を越えていったところです、私は登りましたけど非常に眺めのいい山です。」

どんな講演会でも壇上には水が用意されている。途中で深田久弥が水を飲む音がした、バスの中の解説者があれは「お酒」ですと付け加えて説明された。

このテープは何時の講演会か、またバスの中で解説してくださったのは何方か不明のままでいたが深田久弥研究家で緑爽会会員の髙辻謙輔氏から次のように情報提供があった。

「バスの中の解説者は深田クラブの小松さん、昭和 46 年 3 月 14 日第二回アルプ教室の講演会での録音、深田久弥が茅ケ岳で亡くなる 1 週間前の貴重な録音である。この文は『アルプ 159 号』昭和 46 年 5 月号『深田久弥遺稿・増大号』に載っている。」

第一回目の未丈ヶ岳登山～あまりに遠く断念（昭和 39 年 3 月 28 日）

深田久弥著「十二支の山」～今西錦司さんはその年の干支の山に登る会を作っているそうです。羊のつく山は北海道の「後方羊蹄山」しかない。と述べた後、最後の４行で未丈ヶ岳の第一回目登山の紀行を次のように語っている。

「しかし、羊を未（ミ）に置き換えれば未丈ヶ岳がある。今年（昭和 39 年）3 月の末、越後の奥只見にあるその未丈ヶ岳へスキー登山に行った。宿からあんまり遠いので途中で引き返したが、こんな山を知っている人はあまりないだろう。」

第一回目の未丈ヶ岳登山の記録はわずかこれだけで終わっている。今から 56 年前の事で当時の参加者はもう殆どいらっしゃらないと思われる。会報「山」を調べてもこの行事の報告は載っていない。日本山岳会の主催ではなかったようだ。しかし越後支部にはこのとき未丈ヶ岳を目指したスキー登山のトップを務めた櫻井昭吉氏がいらっしゃる。私は櫻井氏から直接そのときの話を伺ったことがある。

「行事の名称は海外登山研究会かヒマラヤ登山技術研修会のような名前だった。深田久弥の他にも後に日本山岳会会長を務めた方やマナスル登山隊隊員等そうそうたるメンバーがいた。参加者も 60 人を越える大部隊で出発時間も遅れた。先頭で 40cm 位の新雪を約 4 km孤軍奮闘ラッセルしたが交代を申し出てくれる人は誰もいなかった。本当は未丈ヶ岳を往復する予定だったが日向倉とのジャンクションで時間切れになった。」

この時の模様を櫻井氏は越後支部機関誌「越後山岳」第 12 号(2012 年 12 月　越後支部発行)に「日本山岳会の先輩と私の山スキー」と題して述懐されている。

他にもこの時のことを語っている方がいる。緑爽会の平成 24 年 10 月例会は「深田久弥を語る」だった。それを引用する。(緑爽会会報 113 号平成 24 年 11 月発行より)

櫻井昭吉氏（左）と深田久弥
（奥只見丸山スキー場、背景は未丈ヶ岳）

山本良三氏（静岡大学山岳部 OB）～1964 年に銀山平で文部省主催の海外登山研修会があって、海外に行った人たちが 70～80 名集まった。そのとき、宿舎の後ろにスロープがあるのを見て深田さんが「あそこで滑ろうや」と言われたんで、皆でそこをならして 50～60 メートルの斜面を滑りました。(宿舎は共益山の家～現在の緑の学園・スロープは現在の奥只見丸山スキー場と思われる。)

私はこの行事の前年、昭和 38 年、高校一年生の夏休みに、この共益山の家で住込みのアルバイトをしていた。練馬区の中学校が林間学校で訪れていた、奥只見ダム建設の際作業員宿舎として建設された 2 階建 300 名収容の大きな宿泊施設であった。

なぜこの場所で海外登山研修会のような行事が行われたのか、また研修会の内容はどのようなも

のだったか資料が無く長い間不明だった。数年前櫻井氏がその時の募集要項をコピーして拙宅まで届けて下さった。懐かしい謄写版刷りのＢ5版5ページである。

行事の名称　　登山技術研究会(昭和38年度)
主催　　日本山岳協会
担当　　社団法人　日本山岳会
期日　　昭和39年3月27日～3月30日
場所　　奥只見　　共益山の家
参加費　　無料
交通費　　各都道府県所在地より小出駅まで実費支給、印鑑持参のこと
参加予定者
槇有恒　松方三郎　松田雄一　田辺壽　今西寿雄　大塚博美　折井健一　加藤喜一郎
斉藤惇生　竹節作太　芳賀孝郎　日下田実　平山善吉　藤島玄　三田幸夫　村山雅美
望月達夫　山崎安治　渡辺公平　吉沢一郎　他

なるほど錚々たる方々ばかりである。

※要項の参加予定者名に山本良三氏のお名前はないが「その他各支部会員のリーダークラス(35才前後)1名は支部長が選出」とある。山本氏はおそらく静岡支部長の推薦で参加されたものと推察される。

※2012年11月私のブログ（http://ameblo.jp/6682754）　に「未丈ヶ岳にまつわる話」を13回にわたり連載した。当然深田久弥の未丈ヶ岳登山も取り上げた。このブログをご覧になった髙辻氏・櫻井氏から貴重な資料提供を受けることが出来た。

第二回目の未丈ヶ岳登山～道に迷って断念　昭和42年11月19日

紀行文は最初、月刊誌PHP(1969年11号)に「道を探す」というタイトルで発表された。その後単行本では「未丈ヶ岳」と改題したようだ。

「山へ登る道だって途中には下ることだってあるのである。」とあるように、一行は別の尾根に取り付いてしまったのであった。引き返したが登山道の吊り橋は季節が遅く取り外され、渡渉するには深すぎる。迷い道で時間を費やし、未丈ヶ岳登山は断念してダオから帰った。

深田久弥（昭和46年3月21日　茅ヶ岳登山中急逝　68歳 ）没後25年近くたって2回目の未丈ヶ岳登山を案内したＭさんは「山恋いの詩」と題した私家版の小冊子を出した。この「山恋の詩」は1993年にはインターネット上に公開されていたがその後見られなくなった。

「私には長い間内輪にしてきた未丈ヶ岳山行の苦い想い出がある。」として深田久弥をＩさんと二人で案内した2回目の登山について詳しく述べている。「何時かは明かさねばと思っていた・・・・・2回目の未丈ヶ岳登山はおおよそこのような次第であった。」

文中のＩさんとＭさんは共に小出山の会会員である、Ｍさんは小出本町通り商店街で時計店を、その斜向かいにＩさんは書店を営んでいた。時計の修理依頼にＭさんのお店を訪れたら「どうしても2階に上がって行って」といわれお邪魔した。早速見せていただいたのが「道を探す」が載っているPHPだった。

昭和1ケタ生まれのＭさんの登山の体験談は現在とは大きく違って驚くばかりだった。初めて平ヶ岳に登ったのは尾瀬からの縦走で、テントは新潟大学山岳部から借りた等々。Ｉさんは昭和40年代に書店を閉じて首都圏に移られた後日本山岳会の理事を務められた。深田久弥最後の登山とな

った昭和 46 年 3 月の茅ヶ岳登山にも同行していた。

第三回目の未丈ヶ岳登山～登頂　昭和 43 年（1968 年）10 月 20 日

三回目でようやく未丈ヶ岳に登頂したが、どこを探してもその紀行文が見つからない。最後の手段として JAC の HP の掲示板にインターネットで情報提供を求めた。

すると長野県の日本山岳会会員から「三回目の紀行文は無いがその時の同行者等記録は藤島敏男著『山に忘れたパイプ』の 556 ページに載っている」とのアドバイスを戴いた。

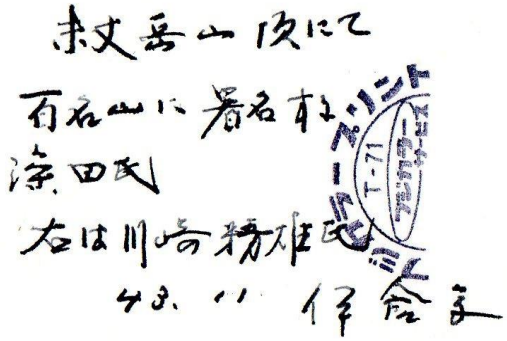
ようやく登れた山の紀行をなぜ書かなかったのか疑問は残る、あるいは執筆はしたが未発表原稿の中にあるのかもしれない。

同行者～近藤、深田、村尾、川喜田、望月、川崎、伊倉、桜井、五十嵐、貝森

※深田久弥の紀行文は無いが、このとき同行した南会津山の会の貝森健治氏が詳細な記録を発表している。南会津山の会の機関紙「いろりばた」第 38 号（昭和 45 年 9 月号)。この紀行文は単行本「いろりばた」(昭和 47 年茗渓堂刊）に収録されている。

講演会「深田久弥と歩いた道」～講師　櫻井昭吉氏（平成 27 年 5 月 9 日魚沼市堀之内公民館）

越後支部櫻井昭吉会員による「深田久弥と歩いた道」の講演のなかで未丈ヶ岳山頂において櫻井会員が持参した深田久弥著「日本百名山」に深田久弥が署名している映像が紹介された、その時の「日本百名山」も会場に展示されていた。(主催みちぐさ山の会)



山頂で自著「日本百名山」に署名する深田久弥　　裏面に書かれた伊倉剛三氏の説明文

日本山岳会名誉会員　川崎精雄氏が昭和 49 年 11 月 3 日に南会津山の会 5 名と上越線小出駅で待ち合わせ、未丈ヶ岳に登った時の記録が「山を見る日」　(昭和 52 年　茗渓堂発行)の「未丈ヶ岳」の項に載っている。この中に次の 1 文がある。「雪が深かった。1968 年秋に登った時、深田さんが『日本百名山』に署名するために座った潅木林は埋まっていた。」

「深田さんと川喜田さんが逝かれたあと、村尾金二さん、藤島敏男さんと、この時のメンバーが相ついで亡くなられた、未丈ヶ岳は思い出の山である。（※中公文庫版にはこの記載は無い）

未丈ヶ岳～この不可思議な山名。一番詳しく丁寧に調べたと思われる文献は 2009 年発行の「小出一番郷山岳史」であろう。郷土史研究家が江戸時代からの古文書、古地図等丹念に検証して「未丈ヶ岳この不可思議な山名」と題した一項目を設けている。結論は、未だ詳らかならず「未詳ヶ岳」のままである。　（写真提供：櫻井昭吉氏）

浅間山からアルピニストが眠る墓所を訪ねて

松本　恒廣

ここ浅間山（せんげんやま）のみに自生すると云うムサシノキスゲ。皆が知っているニッコウキスゲが低地に順応して変種となってここだけに自生していると云う。今年こそ見に行くつもりでいたところのコロナ騒ぎ。出遅れて今年も見損ねたが（花期は 5 月中旬とか）この地多磨霊園近郊は我が家の墓地にも近いことだし墓参りついでに立ち寄ってみようと思い立ったのは 6 月の初旬のことだった。

ところで浅間山（せんげんやま）と称する山は三省堂の徳久球雄編コンサイス日本山名辞典によると 8 山あるが、一番低いのは千葉内房にある浅間山で標高 168m。これ以下は割愛？ 地図によると我が目指す山の高さは 79. 8m。

この山の最寄りの駅は京王線東府中駅。ここには府中の森芸術劇場や市美術館等があり、近くには航空自衛隊府中基地がある。歩き始めて 30 分位で登り口にある某大学野球部合宿所前に着く。その名も内海島岡ボールパークと称するグラウンドはこの時期、野球シーズンなのに部員の姿も見えず、辺りは森閑と静まりかえっていた。このグラウンドの前から参道が始まる。石造りの小さな鳥居、こわれて欠けた石段に足を取られながら急な登りになり一応フーフー云いつつも、アッと云う間に山頂に着く。

昔は陸軍の火薬庫で立ち入り禁止、戦後しばらくは不動産会社所有となっていたものを都が買い取って公園にしたそうだ。そのためか周囲は住宅街になっているが、ここだけは雑木林が保存され山野草も豊富で、蝶々も見かけただけで３種。残念ながら名がわからない。地元の自然保護会の人々がボランティアで環境保全に努めているとか。前山、中山、堂山と三つの小さなピークがあり、そのうち堂山には国土地理院の三角点標石が置かれていた。

標高 79. 8m。浅間神社がまつられており、そこの立札には、南北朝時代 1352 年足利尊氏、新田義興（よしおき）・義定兄弟との古戦場だったとの由来書きが記されていた。又、そこには“うめにひばりに木はけやき”と“もえる若葉の浅間山”の２首が掲げられていた。町の騒音もあまり聞こえてこないし、木洩れ日に風の音が心地良い。軽く昼食をとる。

山を降りて都営多摩霊園の一角に入る。ここは案内書によると 1923（大正 12）年に開設された我が国最初の公園的風景の大規模な墓地で広さ 123 万㎡（39 万坪位）。我が家の墓に手をあわせた後今回は日本山岳会の大先輩に敬意を表して三人の墓所を訪ねることとした。

先ずは田部重治（たなべじゅうじ）（1884～1972）富山県出身。東大卒。会員番号 243。1906（明治 39）年頃より木暮理太郎との交遊を深め各地の山々を歩く。特に奥秩父に親しむ。20 才の頃、南日家から田部家の養子になる。1919（大正 8）年 6 月、慶大山岳部での講演「登山はいかに余に影響しつつあるか」は皆に大変な影響を与えた。法大、東洋大等で英文学を講ずる

かたわら登山に関する著書多数。「日本アルプスと秩父巡礼」「峠と高原」等。昭和 32 年頃より山と渓谷社発行のハイキング雑誌「ハイカー」に「山旅五十年」の連載を始める。最近では五十嶋一晃会員の著作「田部重治の登山と英文学」に詳しい。墓地は 9 区 1 種 18 側 21 番。

木暮理太郎（こぐれりたろう）（1873～1944）群馬県出身。東大中退。会員番号 319。幼少時より赤城山、富士山、妙義山等に登山。田部重治と知り合い二人して高尾、秩父の山々を歩く。その後も槍、双六、薬師、剣等。別山尾根初登。「東京から見える山々」の研究に熱中。晩年はヒマラヤにも関心をもつ。田部とともに奥秩父開拓者として名を残す。1935（昭和 10）年、高頭仁兵衛のあとの日本山岳会第三代目会長を努める。1950（昭和 25）年、秩父金山平にレリーフが建立された。墓地は 22 区 1 種 44 側 21 番。

槇（まき）　有恒（ありつね）（1894～1989）仙台市出身。慶大卒。会員番号 341。1906（明治 39）年富士登山を皮切りに登山を初め、1915（大正 4）年慶應義塾山岳会（後の山岳部）を立ち上げる。スイスに渡りグリンデルワルトを中心にメンヒからアイガー、マッターホルン等を歩く。1921（大正 10）年夏、アイガー東山稜初登攀、大きな反響を呼ぶ。日本に初めて本格的な登山技術を紹介したり、海外登山（カナディアンロッキー）等を成功させる。昭和 19～21 年第 4 代。昭和 26～30 年 7 代日本山岳会会長。1956（昭和 31）年、第三次マナスル隊隊長として初登頂に成功する。文化功労者。名誉会員。墓地は 13 区 1 種 6 側。

多摩霊園は広大な面積を有する園内全域に約 1200 本のサクラと約 1400 本のアカマツが分布し、特に花見の時期は見事である。　（写真はすべて松本氏提供）

（参考　石丸哲也著　山渓新書「東京発半日ゆるゆる登山」山と渓谷社）

箱根山に登るの記

南川　金一

「天下の険」と歌われた旧・東海道の箱根山ではなく、新宿区の箱根山である。新宿区戸山の戸山公園は尾張徳川家の江戸下屋敷跡だという。戸山ヶ原と呼ばれた一帯は明治になって軍用地になり、陸軍戸山学校など軍事関係施設が置かれた。戦後、都営住宅が建設され、現在では高層化されて公園を囲んでいる。ひと抱えもあるような大木が点在する戸山公園の自然は貴重である。その中央にあるのが箱根山で、現地の説明文には、「頂上にある水準点の標高が 44.6m で東京 23 区の最高峰」とある。しかし、練馬区の南西に約 54m の自然地形があり、そこが 23 区の最高地点というから、正確には山手線内の最高地点というべきらしい。江戸時代の絵図には庭内にかなり大きな池があり、池を掘った土を盛ったものであろう。頂上には標石があり、周囲が欠けていて側面の文字は分からない。一辺が 15 ㌢くらいであることからすると、２等水準点の標石と思われる。国土地理院発行の１万分の１地形図「新宿」（昭和 59 年発行）では、頂上の標高点が 42.7m である。俗称なので地形図上に山名表記はない。国土地理院が公表している「基準点成果閲覧サービス」で調べる

と、頂上に水準点も標高点もなく、現在はいずれも廃点になっているようだ。

ところで、今年になってから、私は山へ行っていない。山に物心がついて以来、半年余も山へ行かないなど初めてのことである。理由は排尿障害で、2 月の寒い頃には 1 日に 36 回、夜だけでも 10 回トイレに行くようになった。尿意が切迫性であり、その都度トイレに駆け込むが、排尿量は少ない。過活動膀胱というやつである。条件反射であろう、水道の蛇口に触っただけで突然に尿意が来るようになった。外出前に排尿しても、外の寒い風に当たると 10 分も歩かないうちに尿意が来る。膀胱の機能がイカれてしまったのは、寒さが引き金になったらしい。

泌尿器科には超音波による診断装置があり、残尿量がその場で分かる。私の場合は相当量の残尿と、これも相当な程度に前立腺が肥大していると診断された。すぐに尿道にカテーテルを挿入して尿を出した（導尿という）ところ 1㍑ちかくにもなった。膀胱に大量の尿を溜めていながら、トイレに行っても少量しか出ないという病気で、放置しておくと腎臓の機能に影響を及ぼすという。カテーテルを 2 週間入れっ放しにしておいて、薬を服用しながら膀胱の機能回復の経過を見ることになった。カテーテルというのは要するに管のことで、先端に蛇口が付いていて、自分で蛇口を開けて排尿するのである。カテーテルを抜いた 2 週間後に再度超音波による診断をすると、まだ相当量の残尿があり、膀胱の機能は回復していないので自己導尿をしろという。直径 4㍉、長さ 30㌢ほどのシリコーンゴム製の管を自分で挿入して尿を出すのである。1 日に何回か膀胱を空の状態にしたうえで機能回復を図るというもので、その期間は、個人差があるが何ヶ月かかかるらしい。その先は肥大化した前立腺の除去手術になるのだろう。導尿は初めのうちこそ辛かったが、慣れてしまうと平気になるもので、人間の感覚というものは不思議なものであり、恐ろしくもなる。排尿時間と量を記録していると、摂取水分量や発汗量によって排尿量は変化することがよく分かる。山を歩いてきた日の夜は、トイレに起きる回数が少なかったのが頷ける。

排尿に関与する神経の障害により膀胱機能に異常が生じたのを、神経因性膀胱と呼んでいる。前立腺肥大もその原因の一つであるが、私の場合はそれに加えて雪山での冷えがあったのではないかと思う。最も変調があったのは、10 年ほど前、木曽・奈良井の天照（あてら）山に登った時だった。冬型の気圧配置で北西の季節風が吹く寒い日で、ピッケルを握る手も凍えた。登るとともに雪をかき分けるようになった。そのうちに 30 分おきくらいだった尿意が、20 分おきになり、10 分おきになり、ついに出なくなった。家へ帰って、泌尿器科でもらった尿道を拡げる薬で、ようやく元に戻った。その後も、尿閉こそないが、12〜2 月頃の寒い時期の山では尿意の間隔が短くなるのを何回も経験してきた。冬山での体の冷えが膀胱のセンサーに影響を及ぼすようになったのではないかと考えている。私は冬の山も長靴で登ってきた。靴底には金属のスパイクが打ち込んであり、よほどの氷の斜面でなければアイゼンなしでも済むので重宝してきたが、スパイクから伝わる冷えが足に影響していたようである。山中で休むことはないし、単独ラッセルであるから体は汗をかくほどであり、自分では冷えを意識したことはなかった。

膀胱に影響を及ぼすようになった神経的原因を探るべく、医者は盛んに私の体のことを聞いてくるが、特に悪いところはないので不思議がっている。80 歳近くまで毎年のように冬の山に登ってきたなどという患者は珍しいだろう。診察を待つ患者が診察室の外に列を成しているとあっては、1〜2 分という短い時間で、医者が理解できるようにそれを説明するのは難しい。

自己導尿をやるようになってから切迫性尿意はなくなった。その間隔は 4〜5 時間あるから、それくらいの外出は可能になった。そこで、戸山公園まで散歩して、箱根山に登ってくることにした。

私の家から戸山公園まで約2㌔である。箱根山には頂上へのルートが3本ある。1万分の1地形図では標高差は20mほどあり、3つのコースを2回ずつ登れば標高差120mを登ったことになる。周囲はかなり起伏のある地形で、20mの等高線は最も低い所なので、その辺りまで下ってから登り返さないと20mの標高差にはならない。正味20mの標高差は結構登りがいがあるものである。斜面部分にはツツジが植えられ、路を外れて立ち入ることができないように管理されている。園内には、江戸時代からのものとも思われるような太い樹もあり、都心の一角とは思えないほどに樹木が繁っている。公園内を歩いてくるだけでもよいが、小なりといえども山に登れたとあれば、心は癒される。ただ、都知事が諸悪の根源のごとくに評した「新宿の夜の街」界隈を横目に見る形で山手線の内側へと入って行くのであるから、通りにもコロナ菌が浮遊している懸念なしとしない。なるべく人通りの少ない裏道を歩き、帰りは戸山公園大久保地区（陸軍の大久保射撃場跡）や緑地を繋ぎながら一回りしてくると1万3千歩くらいになる。箱根山での縦方向の移動も加わっているから、山登りの訓練にもなっているだろうと考えている。

『山岳』の編集や百年史の編纂が忙しくなると、山へ行くどころではなかった。当然のことながら脚力の弱化が気になってくる。そんな時、自分の山のコンディションを計るために中央線沿線の山に足を運んだ。時間をかけていられないので、いずれも駅から歩いて登れる山である。一つは相模湖駅裏側の山で、与瀬神社の脇から急坂を登り始めて、登り着いた所は孫山（543m）である。与瀬神社下の国道の標高が210mであるから一気に300m以上の登りになる。さらに2.5㌔ほど北西の「矢の音」と呼ばれているピーク（633m）まで行けば400m余の登りになる。「矢の音」の南東面には、頂上へ直登する急な踏み跡があり、その高距約100mもいい訓練になった。もう一つは鶴ヶ鳥屋（つるがとや）山（1371.4m）で、下車した笹子駅が標高600m、登り着いた稜線が1300mであるから一気に700m登ることになる。三角点のある頂上までは、さらに幾つかの小ピークを越えるのでかなりきつい。登山口から急登する山なので、呼吸と足の調子が試される。ある程度の標高差の急登を、呼吸を乱さず、休まないで一気に登ることができるペース配分が登山術だと考えてきた。体調が戻ったら、箱根山での訓練の結果を、孫山や鶴ヶ鳥屋山で試してみたい。

静かな貸切の山～道志・二つの赤鞍ヶ岳～

中村　好至惠

梅雨時ではありましたが6月25日、昔から好きだった山域・山梨県道志村の山に「山の本倶楽部」（白山書房『山の本』の同好会）の仲間からお誘いがあり出かけてきました。このコロナ禍で移動はもっぱらマイカーですが、道志村役場近くの登山口までの足も、今では公共交通機関（神奈中バスと富士急バスの乗継）では難しい場所となってしまっています。

朝の出発時にはそぼ降る雨のなか、“道志みち”に入ってもワイパーのお世話になっていましたが、当日の駐車場「道志水源の森」に着く頃にはうまい具合にちょうど上がっていました。合羽を着ての登りを想像していたので、それだけで気分は軽くなりました。そしてもっと助かったのは、この高温多湿の時期だけに覚悟していたヒルにまったく出食わさなかったことです。いつも歩いている丹沢前衛の山では必ずヒルに出会うので、取り敢えず飽和食塩水をスプレーに準備していきましたが、その出番もなし！

当日は上からの雨粒はなかったものの、曇天のまま山にはガスがかかり、終始モノトーンに近い世界を歩くことになりました。が、却って霧の深さが道志の山の趣きそのもののようであり、しか

も厚い霧の層が太陽の光を遮ってくれたおかげでサウナのような蒸し風呂状態から免れることができ、急登続きもなんとかバテずに済みました。

さて登山道はまず杉の植林帯の登りに始まり、多少の緩急はあるものの、上に行くほどにつま先上がりの角度が激しくなり、これでもかと続きます。急峻な斜面にずっと植えられた植林も、ある程度枝打ちの手が入っているので、とことん暗くはなく陰鬱な雰囲気をさほど感じさせません。途中から自然林が現れると途端に雨で色をより深めた緑の世界に包まれ、ここではコロナ禍の心配など一切ない世界、肺の深くから深呼吸し樹木の息吹を胸いっぱいに吸い込みました。しばらくの我慢で稜線部に近づくと、丹沢ではすでに見ることが出来なくなっているような見事なブナの林になります。

私は初心者の頃から道志や秋山村界隈の静かな山を好んで一人よく歩いていましたが、ここに来て尚更この山域に惹かれるのは、こうしたブナなどの豊かな樹林が今もまだ残っていることが大きな理由の一つです。海に面している丹沢山塊は南面ほど樹木の立ち枯れが顕著であり、同じ山でも海風の影響の少ない尾根の北側などでは枯死から免れています。つまり道志山塊に多くのブナが健在なのは、大きな丹沢山塊が南に立ちふさがり、オゾンや排気ガスなどを含んだ風を直接受けないように遮ってくれていると推測できます。が、昨今の温暖化による風雨の激化、暖冬、降雪の少なさ等などの影響を考えると、道志のブナ林も時間差で丹沢と同じ運命を辿るのではないかと不安です。しかし歩く足元に落ちている数え切れないほどのブナの実は、どれほどが育つかは分かりませんが、まだ生命の連鎖を感じさせてくれます。

そんなブナの大木がつづく稜線上にある「赤倉雨量観測所」に飛び出すと、ワラビタタキの別名がある赤鞍ヶ岳に到着。三角点はその雨量施設を回り込んだ裏、笹藪のなかにひっそりとあります。この道志の稜線部には同名の「赤鞍ヶ岳」が二つ続いてありますが、ワラビタタキより西にある、その後に訪ねた赤鞍ヶ岳は朝日山と呼ばれています。当日はその二つの赤鞍ヶ岳の山頂を踏むという目的もありました。

ワラビタタキの三角点をなでてから少し進むと一気に見晴らしのいい（はずの）場所となり、そこでお昼となりました。正面の丹沢（おそらく加入道山方面）の麓辺りのガスが、風でちぎれては流れ景色が細切れに見え隠れします。本来ならそこから正面の丹沢山塊を描くところなのですが、霧に覆われ叶いません。猛烈にガスが渦巻く展望台を早めに切り上げ稜線を進むと地図にも載っている「ウバガ岩」で、その大きな岩塊を乗り越え進んでいくと、私の好きな花・屈指のコアジサイが咲いているのに出会い大感激！　この花には、2016 年 6 月緑爽会例会で箱根・芦ノ湖西岸散策の折、ずっと湖畔の道脇に咲き続け、ウットリするような香りに満たされながら歩いた思い出があります。参加された皆さま、あの香りを覚えていらっしゃいますか？

しばらく行くと本日の下山ポイントでもある秋山峠に到着、そこから 5 分ほど北に向かうと見事なブナの大木に囲まれたもう一つの赤鞍ヶ岳＝別名・朝日山に到着します。山頂標識の脇のブナには、どなたの手作りか、味のある山名板が取り付けられています。なんとも雰囲気のある山頂でしばし感慨に浸り、何十年ぶりかの懐かしい朝日山・赤鞍ヶ岳を後にしました。そして再び秋山峠、そこから樹林

の中を少し行くと、あとは補助ロープが連続する滑りやすい土と岩場がミックスの急降下が 30 分強続く下山が始まりました。ひどく長く感じた急降下を頑張り、どうにか無事植林帯の普通の下りになったときにはホッと一安心。長い下山も林道出合で終章となり、その地点では眼前に山頂を雲に包まれた丹沢山塊がドーンと迫っていました。ここはスケッチポイントになるな…とチェックを入れつつ、日の長い時期の夕刻前の国道を駐車場に向け再びトボトボ歩き出しました。

誰にも会うことのない静寂と渋さのこの山域に、やはり今も変わらず惹かれていると思い出させてくれた山歩きの一日でした。　　(写真:中村さん提供)

～～《予告など》～～～